
60年後のラブレター

ムテキング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

60年後のラブレター

【Nコード】

N8530I

【作者名】

ムテキング

【あらすじ】

あの時の自分は若かった。自分に自信がなかった。恥ずかしかったのだと年を取ってから、始めて分かった事もある。そんな自分の人生を思いかえす話です。

第一話

僕が小学校6年生の時、好きな女の子がいた。そう、これが初恋だった。しかし奥手な僕が彼女に伝えることができなかった。それならばと、僕はラブレターを書いた。ラブレターなど書いたことがない僕は、学校の図書室で調べた。普段は、皆でサッカーをしている昼休憩を有効利用した。なぜなら、皆外に遊びに行くので、図書室には人がほとんどいないため、僕にとっては都合がよかった。そして、とうとうラブレターが完成した。ただ、素直に僕の気持ちを書いた。僕がどれだけ好きなのか、なぜ、好きなのかを書いたんだ。しかし、書いたのはいいが渡せなかった。そう、僕には渡す勇気がなかった。そして渡すことができないまま卒業式を迎えることになった。そして、卒業の記念に皆でカプセルを埋めることになりました。僕は、ラブレターを埋めることにした。僕の気持ちと同じく地中に閉じ込めた。

そして、月日は経ち、60年後、小学校が、取り壊されることになったのを僕は耳にした。僕、いやわしの年もすでに、72歳、同級生の何人かはこの世にいないだろう。初恋の人も生きているかはわからない。ガキ大将の友達もどうなっているかわからない。なぜなら、僕は、高校を卒業してから、大学のため地元を飛び出した。そして大学卒業後も地元では就職しなかった。27歳の時僕は結婚した。しかし、初恋の相手ではなく、コンビニで働いていた女性であった。僕の勤めていた会社の近くで、お昼のお弁当を買いに行っていたのが始まりだった。そう、初めて出会ったのは今でも覚えていそう、あれは25歳の時のことだった。おつとその前に話したいことがあるんだ。実は、僕は24歳の時一度会社を辞めたんだ。まあ、今だから言えるけど、人間関係だね。いやな先輩がいてさ、人間のクズともいえる人が。そういう人間のいる会社には未来がないと思い僕は辞めたんだ。ちなみに、その会社は20年後、摘発され

倒産していた。嫌いだった上司とは、二度と会うことがないと思っていたが、僕が50歳の頃、ニュースで見かけた。殺人犯になっていた。まあ、それはさておき、辞めた後は、僕は彷徨っていた。酒と女とギャンブルにはまっていた。朝はパチンコを打って、昼は酒を飲み、夜は女を抱いていた。ただ。心の隙間を埋めたかっただけなのかもしれない。よくうさは寂しくて死んじゃうという言葉聞いたことがあるだろう。まさに自分がその通りであった。来る日も来る日も僕は繰り返していた。ただ、ある日僕は、家を掃除していた。その時に、手紙を見つけた。小学校の時の未来の自分に書いた手紙であった。それを見たら、僕は涙が溢れていた。内容は、がんばれ、がんばれ、みんなが見てなくても僕が見ている。短い文章であったが、僕には走馬灯のように、僕の細胞たちを奮立たせた。他人が見ても、なんだそれとか、価値がないなど、さまざまな意見があると思う。ましてや、他人には心に響かないかもしれないが、僕の心には響いた。昔の自分に感謝した。僕はハローワークに通い始めた。それから、何度も何度も面接に落ちた。だが、僕はあきらめなかった。あきらめそうやくじけそうになるたびに僕は手紙の言葉を思い出していた。そして、24回目のある会社でようやく受かることができた。本当にうれしかった。人生には正直にいうと挫折なんかは味わらない方がいいに決まっている。会社を辞めたことない人間には分らないと思う。ただ、その人達はすごいと思う。だが、働いていない人間や辞めた人間の気持は分らない。そして僕はようやく再スタートをきるようになった。そう僕は24歳と1ヶ月だった。話は戻るが、僕が会社に入って半年たった時の出来事である。いつも僕はコンビニでお昼のお弁当を買っていた。そう、その日もコンビニにお昼を買いに行ったんだ。僕はいつもと違和感をその日コンビニで感じていた。レジにいつも二人いたおばちゃん。今日は一人だということだ。それと、年は20前後と思われる。女性がいた。身長は150から155センチぐらいで、顔が小顔で目がクリっとしている。髪の色は黒で長髪、きりっとした眉毛で柔

らかそんな唇や体。そう、まさに僕好みであつた。ただ、何かが頭の中で引っ掛かつていた。その時はまだ分からなかった。とりあえず、僕はいつも通りお弁当を買った。そう、ハンバーグ弁当を。そして近くの公園で食べて、会社に戻った。仕事も終わり会社を出ようとしたときに僕は閃いた。頭の中に光が広がった。そう、お昼に引っ掛かつていたことが分かったのである。

「似ているんだ」

思わず声が出てしまった。僕は回りを見回した。誰にも聞かれない事を確認し、胸をなでおろした。僕は急いでマンションに帰った。普段なら歩いて帰るが今日に限っては足で帰った。走ろうとも思ったが疲れるし恥ずかしいからやめた。マンションに帰るなり僕は、押入れの小学校6年のアルバムを見た。

「やつぱり」

スッキリした。本当にスッキリした。このスッキリ感を例えるなら、そうだなあ、小学校の時の事だが、割り算のしている時の話なんだが、僕はその時に分数というものを知らなかった。だから $10 \div 3$ $\parallel 3 \cdot 3 \cdot 3 \cdot \dots$ が永久に続いて、どこまで書けばいいんだといったも考えていた。そんなある日、僕は分数と出会ったんだ。 $10 \div 3 \parallel 3$ と三分の一と言い切る事ができたんだ。これはスッキリだと僕は感心をしていたんだ。それと似ている。まあ、関係ないけどね。

第二話

僕は、写真を見てピンときた。写真だけに。今日は冴えているなと僕は感心をしていた。自分に。実は、初恋の人にそっくりなんだ。ただ、本人と違うことは知っている。

それはね、24歳のころに会社を辞めて、すぐの話なんだけど、地元へ一度帰ったんだ。ひっそりね。こそこそしながら。まるで泥棒見たいね。心の弱さだと思うね。仕事をしていないことでプライドが許さなかったんだと思う。仕事をしている事で世間様が普通の目線で見えてくれていると自分で考えていたんだと思う。自分はプーですという姿を誰にも見せなくなかったんだと。たぶん、一生暮らせる金さえあれば、プーであろうとなんであるうがこそそとしなかっただろう。所詮この世は金しだいではどうにかなる。金さえあれば欲しいものは手に入る。女だろうが権力だろうが。今の世の中なら手に入る確実に。まあそれはいいとして、その頃の僕はひねくれていた。一つは仕事をしていないから、でもう一つの方は、初恋の人がもうすでに結婚していることを知ったからである。絶望という言葉が心に染みていた。分かる人なら分かるはずだ、愛している人が手に入らなかった。これがどれだけつらいことか、後悔という言葉が頭の中に埋め込まれていた。なぜ、あの時、僕はラブレターを渡さなかったのか、今になってまた苦い思い出が蘇ってきた。考えたくないんだ、もしもの話なんて、もしあの時勇気があってラブレターを彼女に渡していれば、もしかしたら付き合っていたかもしれないとか、結婚していかも知れないとは考えたらきりが無い。一生後悔し続けることは分かっていたのに、あーくそ、くそつたれ。ふざけんなよ、ばっきややろう、ただ、心の中でしか言うことができない自分を情けなく思うしかできなかった。色々と考えていた、人を殺すことや自殺についても、ただ、ただ、それを実行する勇気がなかった、当たり前であるラブレターを渡せなかった男だぜ。思いが

思いで終わる男だぜ。だがそれはあの頃の俺であって今の俺ではない。いつかは乗り越えないといけないんだ。自分を超えないといけないんだ。誰かが助けてくれる。そんなことはない。自分がしつかりしないとだめなんだよ。もういやなんだよ。後悔するのは。二度とごめんだ。ラブレターを渡せなかったせいとか、つまんね言い訳ばかりいつていたくはないんだよ。弱い自分とはさよならするんだ。僕は時計を見た。夜の１１時１１分１１秒だった。

「今、俺は生まれ変わった。１１時１１分１１秒を持って生まれ変わった。さよなら昔の俺、そして誕生おめでとう俺」

声を出して叫んだ。近所迷惑だが。今の俺は叫ばずにはいられなかった。案の定、隣の部屋から壁を蹴られた。俺は気にせず寝た。そして朝起きて、自分に正直になった。単純だが頭に正直という言葉に刻みつけた。自己暗示見たく。それから、決めた、決めたんだ。

今日、仕事が終わったら告白すると。僕は仕事に向かった。ドキドキいやわくわくしていた。新鮮な自分に戸惑いも感じていたが、悪い気はしなかった。そうさ、僕は生まれ変わった、変わった、変わったんだと。そして、仕事が終わって、僕はコンビニに向かった。

第三話

僕はこちらのコンビニの時間帯を把握している。彼女は昼から夕方までだからね。僕はコンビニを除いた。そこには、彼女がいた。俺は、ガッツポーズをした。こぶしを握りしめて。僕は、コンビニが見える近くの場所でタバコをふかしながら彼女が仕事を終えるのを待っていた。ちなみに、タバコの種類はラッキーストライクだ。名前が気に入っているの。なんてったって、幸運の中心だからね。おっと、彼女がコンビニから出てきた。よし、もうじきこちらに来るぞ。えっ、なんでっと思うかもしれないが、実はこの道しかないからさ。僕は自分の頬を両手で叩き気合を入れた。彼女と俺との距離は50メートル、40メートル、30メートル、20メートル10メートル。よし、いくぞ。

「あ、あのすいません」

僕は彼女の右斜め前に立ちはだかった。え、なぜかって、この立ち位置が一番いいと本にかいてあったんだ。受けいりでもなんでもいい、使えるものは使わないとね。だって、分かんないから、今まで漫画とかドラマとかでしか恋愛なんて見たことないからね。よくいうだろ、当たって砕けるといや、砕けてはだめだけどね。

「え、は、はい？」

彼女は戸惑っていた。というか怯えていた感じもあったと思う。だって、いきなり見知らぬ人が立ちはだかっているんだぜ。しかも、女、子供ではなく、見知らぬ成人男性だから。俺だって正直怖いよ。知らない人が声をかけられたから怖いよ。正直怖いよ。道を聞かれとも怖いよと思うのに。会社でも人と話すのは苦手だしね。変な人と思われるかもしれないが言う。

「あなたが好きです・付き合ってください」

「えっ……」

彼女は目が点になっていた。それと同時に僕は全身が震えていた。

頭の中が真っ白というか、もやもや、んーとにかく、あーわかんないが、興奮している。そう、そう、振動がドキドキ、まるで全速力で走った後見たくなっていた。体験した人しか分からないと俺は思う。

「え、とあの」

彼女は言葉に詰まっていた。それはそうだろう、いきなり、告白されたのだから、それも見知らぬ人に。だが僕は彼女が黙っているのをいいことに。気持ちを言いまくった。

「あ、僕の名前は、佐藤 勇次です。コンビニで一目ぼれしました。あなたと付き合いたいんです」

俺は頭を下げて、手を指しのばした。

彼女の笑い声が聞こえた。

「・・・くす」

俺はゆっくり顔を上げて、彼女を見た。

「えーと、ははは」

僕も笑った。

「えと、ごめんなさい。佐藤さん？でしたっけ」

「はい、佐藤です。佐藤 勇次です」

「とりあえず、お茶でも飲みにいけますか」

「え、は、はい。ぜひ」

「私、あなたの事知らないし、返事は後でもいいですか？」

「は、はい」

「あつ、私の名前は田中 百合子といいます」

「田中 百合子、良い名前ですね。あ、あのそれでは、その喫茶店でいいですか？田中さん」

「はい、佐藤さん」

二人は喫茶店へと行った。

僕の心はキャンバスに描かれる前の真っ白い状態であった。これからどのように塗っていくのか楽しみな展開である。赤く塗るのか、青く塗るのか、はたまた緑に塗るのか。

それは本人さえも分からない。喫茶店に入り僕らは飲み物を注文した。僕はアイスコーヒーの砂糖入り。なぜなら佐藤だからさ、だってそうだろう、佐藤なしって、なんか悲しいからね。だってそうだろう、佐藤ありの方が、皆に期待されていそうなイメージだからね。心の中で思っていた。さすがに彼女に対していきなりこれは寒いだろうと思っていた。僕は常識人なので今のを口に出して言う勇氣はなかった。

だがいつかは言ってやろうと思う。そして彼女が頼んだのは、オレンジジュースである。

かわいいなあとは僕は思っていた。注文はすぐに来た。ものの2、3分で。しかし、喫茶店から注文するまでまだ、これといった会話がない。というか、僕のキャンバスにはまだ筆が入っておらず、何から書いていいかが分からない状態であった。しかし沈黙に耐えきれなかったのかどうかは分からないが、彼女の方から話しかけてくれた。

「あの、佐藤さん、どうして私なんですか？」

彼女は直球に聞いてきた。内角をえぐる渾身のストレートであった。誰にも打てないが、ここで空振りには許されないぞ僕。ここで見事にジャストミートをしなければ、僕はもう試合に出ることはできないだろう。一生スタメンだ。そんなのは二度とごめんだ。だからこそ、今こうやってフィールドに立てたんだぞ。よし、打ってやれ俺。

「あ、あなた様の雰囲気、声、体、顔全て好きです。あなたが好きで好きでたまりません。ぼ、僕とちゅきあつて下さい」

ばか、ばか、本当に馬鹿、何噛んでるんだ。やってしまった。もう、野球に例えるなら、9回裏、ノーアウト満塁で打ち損じてトリプルプレーされて3アウトゲームセットだ。僕は顔がゆでタコみたく、真っ赤で、汗がだくだくであった。どうすればいいんだ。考える、もっと、頭を使うんだ、脳みそあるんだろ、こんなときに使わないで、いつ使うんだよ。受験の時か、そんなのどうでもいい。今だよ、今、今使え、二度と動かなくなってもいいから、知恵を絞り出せよ。

頼むよ、神様、いや、だめだ、神に祈ったらだめだ、自分を信じるんだ。この世で最終的に信じられるのは自分だぞ、自分の人生だからな。人を頼るな、神を頼るな、自分に頼れよ。よし、くるぞ、来るぞ、もうじき来るはずだ、来いよ。来いよ……こねえーよ。ごめんよ、自分。まじで思いつかないぞ。頼むよ、ほんまに頼む……。もう、あたふたというか、訳が分からなくなってきたその時、奇跡が起こった。奇跡とは起こらないから奇跡と言うんだけど、起きてても奇跡と言いたいんだよ。

「ハハハハハ」

彼女の笑い声が聞こえた。

「えっ」

「あははは、ごめんなさい。おもしろかった。うん、こちらこそ、お願いします」

「えっ」

分かるかな、そう、まるで、あっそういえば、夏に宝くじ買ってたなとふと、思い出し、インターネットで調べて見ると宝くじの一等3億円が当たってた、当たってた、当たっていた……。よしやあーといった感じに似ているかもしれない。実際には分かりません、当たったことないんでね。ごめんなさい、分かりません。「えっと、えーお付き合いくれるんですか？」

僕は恐る恐る聞き返した。

「はい。お願いします」

「はい、こちらこそ、ありがとう」

正直、今まで生きていた中で、ありがとうと心から、ありがとうと言った事のない僕であるが、ありがとうと今は言える。お父さん、お母さん生んでくれてありがとう、そして、全世界の人に幸福を祈ります。神様仏様そして彼女様最後にもう一度だけ言わせてもらいます。ありがとうございます。

その後、彼女と電話とアドレス交換をして、

次の休みの日にデートの約束をした。彼女と別れた後、寝る前にメ

ールのやりとりをした。内容はよくあるかもしれない。

「今日は楽しかったよ」

「私も、次どこ行く」

「映画は？ほらあのラブストーリーの」

「あつ、見たい見たい。行く行く」

「今度の土曜日は？」

「大丈夫だよ」

「何時にどこで待ち合わせする」

「ゆうちゃん決めて」

「ゆりちゃんが話してくれた。本屋でいいかな朝の11時で」

「うん、楽しみ」

「僕も」

「えへへ」

「なんかいいね。こういうの夢だったんだ」

「私もこういうの好き」

「好きだよ。ゆりちゃん」

「えへへ、私も好きだよゆうちゃん」

「うん、ありがとう。あ、ごめんね。夜遅くに。おやすみ」

「ううん、うれしかったよ。本当に。おやすみ。また明日ね」

「うん、必ず連絡する」

他人の人が見ると腹が立つかもしれないし、何やってんだこいつらとか思うかもしれない。実際に、僕もそうだった。ドラマとかあつて、こういうデレデレのシーンを見ていたら、体の底から憎しみが生れ続けていた。まるで欲望の如く。欲しても欲しても物足りない感じであった。だが、僕は変わった。生れ変わった。彼女ができたことで。これがたぶん、振られていたら、話は別だったと思う。さらに、僕は、ラブストーリーとかラブラブなシーンが嫌いになつていただろう。もしかしたら犯罪者になつていたかもしれない。そこまで、恋愛と成功は心を豊かにし、失恋と失敗は心を貧しくさせる。ただ、僕は考えていた。この世にもしはしない。もし、なんて考えて

いたら鬱病になりやすくなってしまう。

第4話

まあ、人間が全員成功したら、この世に戦争だの、争い事がなくなるだろうが、それは、ありえない。成功があるから失敗もある。人の本性は失敗して初めて分かる。とことん下の人生を歩いているものは、なんだかんだで、精神的に強い。だが、上から下へ一直線に落ちてきたものは、精神的に弱い。だがこの弱いといっても強くもある。それはね。失敗して自殺をするものがいるからね。死ぬ決断力があるんだつたらとそれを糧にやり直せるだろと思う人間もいる。だが、それができないから自殺する。人にはキャパシティがある。

人には欲望がある。人には生死がある。この世を変えることはできない。だが、自分を変えることができる。人と人とのつながりの大事さを改めて考えていた。僕は彼女と出会って変わったんだと。生まれ変わったんだと。生にありがとうと。色々考えていたら、いつの間にか寝ていた。彼女、そう、田中百合子と僕、そう佐藤勇次は27歳の時に結婚した。彼女は24歳だった。彼女と出会って3年で僕は彼女の色々な事を知ったし、彼女も僕の事を色々知った。彼女は赤い色が好きだ。僕は青い色が好き。彼女はチーズケーキが好きだ。僕はモンブランが好き。彼女は一人っ子だ。僕は二人兄弟で弟がいる。彼女は両親がいない。僕は両親がいる。彼女は犬が好きだ。僕は猫が好き。彼女は天使だ。僕は凡人だ。彼女は僕が好きだ。僕は彼女が好きだ。彼女は結婚する。僕は結婚する。彼女は女の子が欲しい、僕は男の子が欲しい。彼女は病だ。僕は元気だ。彼女は女の子を産んだ。僕は協力した。彼女は死んだ。僕は生きている。彼女は天国だ。僕は地獄だ。

彼女が病にかかった。最初は風邪だと思っていた。彼女は市販の薬で大丈夫と病院に行かなかった。彼女が夜に吐き気を催した。彼女は大丈夫と言ったが、僕はすぐに救急車を呼んだ。顔が真っ青であつたから、病院の結果で彼女の結果が分かった。インフルエンザ

であつた。僕は少し安心をしていた。白血病や脳梗塞。心筋梗塞や癌だったらどうしようと。インフルエンザなら死ぬことはないと思つていた。それが甘かつた。甘い考えだつた。5日経つても良くならなかつた。6日目彼女が息をひきとつた。享年27歳だ。早すぎる死であつた。僕は狂いそうになつたが踏み止まつた。なぜなら、僕には娘がいるからだ。そう、僕はお父さんなんだから。3歳の娘にはまだ死というものが理解できなかったと思う。いや、理解していても分からないのだろう。ぼくにとって終わりの日と始まりの日だ。彼女が死んでから、思ったことがある。自分の両親について。本当に助かつている。ぼくにとっては娘で、両親にとっては孫だ。よくめんどろを見てくれて助かつている。言葉ではいえないくらい感謝している。

弟にもだ。本当に家族つていいなあとしみじみ思つていた。最近、僕は涙もろくなつてきている。年のせいかな。彼女が死んでからは、僕は忙しさで気を紛らわそうと必死であつた。ただ、その中で娘だけが生きがいであつた。彼女のとの約束のためにも。実は、彼女が病院で死ぬ前に手紙を書いていたんだ。

僕は、彼女が死んでから、病院で荷物を整理している時に発見した。その手紙の内容にはこのような内容が書かれてあつた。

第5話

拝啓、佐藤 勇次様へ

今、この手紙を読まれているということは、私はこの世にいないかもしれません。たぶん、あなたはこんな手紙を書いている事を知ったら、さぞかし、怒ることでしょうね。

それも承知で私は書きます。まずこれだけは、言いたいで、先に書きます。幸せでした。あなたと一緒に人生を歩めて、私は幸せでした。あなたと、初めて会った時、覚えていますか？あなたが、声を掛けてくれた時と違いますよ。私が、あの店でバイトを始めたときですね。私が、商品を陳列している時、誤ってお弁当を落としてしまったんです。その時、私は店長に怒られると思ったとき、あなたが何も言わず落ちた弁当を拾って、すぐさま、弁当をレジに持っていて、落ちた弁当を買ってくれましたね。私は、あの瞬間心が温まりました。世の中にはこんな人もいるんだと。人にとってはどうでもいいことかもしれませんが、私にとっては、忘れられない思い出です。あの出来事があつたからこそ、私も人と人との関係を大切にしようと思いました。ありがとうございます。そして、本当に残念なことが2つあります。一つは、私と貴方の愛の結晶の愛子の事です。愛子が生まれもうじき三歳になりますね。あなたと私と愛子で手をつないで、七五三に行きたかったね。幼稚園の卒業式も一緒に写真なんか撮りたかったね。小学校も中学校も高校も出きれば大学もいつて欲しかったな。そして、なんといつても結婚式の花嫁姿を見たかったね。あなたは最初旦那さんに対して必ず、だめだ娘は渡せないと反対するんでしょうね。結婚式で泣いてみたかったなあ。そして、初孫ができて、おばあちゃんになりたかったなあ。年をとったら、あなたと二人で、ゆっくり、ゆっくり、ゆっくりと川の土手を手を繋いで歩くのが楽しみだったのになあ。

勇次様、改めて言わせてもらいます。

[illegible]

「ふざけるな、ふざけるな、ふざけるなよ——」

僕は、その場で叫んだ。今までこんなに叫んだことは一度もなかった。それに、憎悪というべきか、むかついた。心の底からむかついた。今ならば、非常になれる。それほどまで、腹の中が煮え切りまわつていた。何が、良い人を見つけて下さいだ。ふざけるな、ふざけるなよ。お前以外いねえよ。娘にとつてもだ、お前がお腹を痛めて、産んだ子供だぞ、お前を忘れるはずがない。そんなこと、自分が一番わかつてるんだろ。僕は涙が溢れてきた。そういう手紙を書くなんて、本当にしんどかったんだろうな。只のインフルエンザだから、大丈夫だと思つていた。自分の認識不足を恨んだ。心の奥底から恨んだ。どうして、気付いてやれなかっただろう。もっと、生活に気をつけていたならば、こんな事にはなつていなかったんでは、僕の脳裏に後悔が生れ続けてきた。ベルトコンベアで生産しているかのように、人間はなんて不平等なんだ。病気で助かる人がいれば、死ぬ人もいる。金持ちの人がいれば、貧乏の人もいる。仕事がある人もいれば、ニートも存在する。

なんだよ、ふざけているのか神様よ、いねえーだろ、本当は、神も仏も悪魔も何もかもよ、

只、人間がかってにこうだったらいいなあ、こんな生物がいたらいいなあと、只の妄想で生まれてきたんだろ、己の心が弱いから、生まれてきたんだろ。誰か答えてくれよ。頼むよ、神様。僕はその

日、病院から自宅に帰らず、近くのビジネスホテルに泊まった、ビジネスホテルに入り、一人になったら、すぐに布団の中に入った。眠るためではない、ただ、悩みに悩みたかった。幸い土曜日だったので、会社が休みで助かっていた。今、この状態では、人に会う自信がなかった。自分の理性と言うのを保つ自信がなかった。何か気に障ることが起これば、即座に僕は暴れるだろうと予測していた。娘は、親に預かってもらっている。こんな姿をしている自分を娘には見てほしくなかった。見せられなかった。こんな弱い自分を。誰にも見せたくはなかったんだ。だから、私は一人になって、弱い自分を無理やりに倒そうと決意した。娘のために。そう、娘のために。もし、娘がいなかったら、僕はもう、自殺していたかもしれない。生きる希望がないからだ。心の隙間を埋めてくれる人がこの世にいないから。

黒色はいつまでたっても黒色なんだ。もう、本当に、僕の頭と体は限界だった。僕はいつのまにか、意識を失っていた。だが、次に目覚めたら、残りの人生を娘のために注ごうと決意していた。

第6話

僕の妻がこの世をさつてから、20年の月日が過ぎた。今日は娘の結婚式である。娘は23歳になり、僕は50歳になっていた。結婚式というのは、親としては寂しいというか、なんといおうか、複雑な気持ちである。

幸せという言葉に私は弱くなってしまったのかなあと最近私は考える。娘に彼氏を紹介された日の出来事だ。

「お義父さん。娘さんを下さい」

言われた。とうとう、言われた。娘を授かった時から覚悟をしていたが、いざ言われてみると、なんも思いつかない。いやね、お前なんか、娘はやらん。断ると言つてやろうとも正直、本当に思つたよ。でもね、会つたその日に急に言われても、いくら心で準備していたとしても、いざ、言われてみたら、そうですか、見たいな気持ちになつてしまう。それでは、だめだと自分に叱咤し、娘と彼氏の顔を見た。彼氏の方は、緊張からか、体が震え、汗が額から流れていた。だが、左手で、娘の右手をギュツと握つていた。

それを見ていたら、すんなりと言葉が口から出てきた。

「娘をよろしく頼む」

私は、彼氏と娘にふかぶかと頭を下げてお辞儀をした。すると彼氏も深々とお辞儀をしながら話した。

「あ、ありがとうございます。娘さんを、必ず幸せにします」

娘の方も涙をだしながら話していた。

「ありがとう、お父さん、私、幸せになるから。絶対に」

幸せになつてくれたらいいな。私は結婚式を見ながら、涙を流しながら、妻の写真とともに見ていた。娘の結婚式を。本当に二人とも幸せそうだった。ただ、正直な話、私は結婚式と言う言葉は、私は好きになれなかった。そう、なぜなら、死んだ妻とは結婚式をしていなかったからである。結婚式はせず籍を入れただけであつた。情

けないことに、私には、当時、お金が余りなかった。まあ、簡単な話貧乏だった。しかし、私と死んだ妻は、愛し合っていた。本当にその誓いの印というのも、おかしい事なんだが、当時の私は、欲しかった。結婚式は、資金がたまり次第あげようとしたのだが、その途中に神様からこどもを授かりました。当時の僕は、結婚式をあげようと妻に言ったが、妻は、溜まった結婚資金は子供のためにとっておくと言いだした。妻は、頑固なところがあり、一度言いだすと聞かなかった。僕が、説得しても、それならば、私、離婚するとか言いだしたりしたのであった。ただ、言葉ではそう、言っているが、本心はしたいと思っていたに違いない。ただ、家の家計簿の問題であっただけで、

素直になれなかったのだろう。しかし、その日から、当時の僕は、一生懸命にお小遣いを少しずつ、貯金をしていた。妻には内緒で、毎月一万円ずつ、貯金をしていた。そう結婚資金を貯めていた。しかし、その夢が叶わなかった。叶うことが二度とできなくなってしまった。ただ、私が妻の元に行った時は、結婚式を挙げたいな。娘たちの結婚式も無事に終わり、娘は私の場所から旅立った。寂しいと言われれば、寂しいが、正直、安心した感じがある。終わった感じもあるね。これなら妻に会っても、文句は言われないと思うな。会いたいな。妻に、一目でいいから、会いたいな。

その日、私は夢を見た。そこには、草原があり、動物たちがたくさんいた。犬や猫、像やキリン、ライオンやトラ、サイやイノシシ、他にもたくさん動物たちがいた。そして、白いウエディングドレスを着た。妻がいた。

私は妻の元に駆け寄った。年老いた体で。しかし、不思議な現象が起こった。妻の元に駆け寄っている内に、体が40代、30代、20代と若返っていった。

「おーい」

僕は手を振りながら、妻の元に駆け寄った。服装もいつのまにか結婚式のタキシードになっていた。

「おい、おい」

全速力で駆け寄った。

「ハァー、ハァー。やあ、久しぶり」

僕は、彼女の顔を見た。

「あなた、がんばったね」

妻の笑顔とその言葉に、僕は目から涙が噴き出した。今まで溜まりに溜まった、不安や思いが、爆発した。精一杯張っていた気が緩んだというか、緊張の糸が切れたんだろう。

「あ、会いたかった。本当に、色々あったんだよ。寂しかった」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8530i/>

60年後のラブレター

2010年10月15日22時28分発行